「ニューイングランド滞在記―変わるアメリカと変わらぬアメリカ―」

2015 年より 2016 年までハーバード大学ライシャワー日本研究所に所属した。出発まで大学での講義担当と並行して、ボストンでの住居や車の手配等の準備を行うのは大変なことであった。ハーバード大学では研究会への参加や資料調査を行ったが、日本の大学と大きく異なる点で印象的だったのが、図書館の相互貸借サービスの充実度であった。

滞在期間は大統領選挙の時期と重なり、若者のサンダース支持を身近に見て、ヒラリー優位のメディア報道への違和感は早くからあった。ボストンの住居から少し行くと労働者階級の人々の住む地域となり、ある一線を挟んで明らかに異なる環境がそこにはあった。置き去りにされたと感じる人々の声を十分に聞こうとしなかったのではないか。

トランプ政権の発足はウィルソンの時代からほぼ 100 年目にあたった。孤立主義的なトランプと国際主義のウィルソンは対極にあるように見えるが、後者の対ラテンアメリカ政策に示されるように、アメリカが第一という意味では共通項も見られる。冷戦が終わった時に、アメリカは、その外交・安全保障がどうあるべきかという、新たな難題に直面した。この間にアメリカがどのように変わったのか、また変わらなかったのか。短期的に現象を追うのではなく、大きな歴史的文脈の中でアメリカというものを捉える必要がある。

また、日本はそうしたアメリカに対して、これまでのように受動的にではなく、能動的・主体的に働きかける必要があるのではないか。日本研究の分野を超えて、それぞれの分野で日本の研究者が国際的に発信していくことが極めて重要だと考える。